日本で最初の公許女性医師

「荻野吟子」の生涯



1 吟子の出生と荻野家「ながやんち」

荻野吟子は、嘉永４年（1851）３月３日、幡羅郡俵瀬村（現在の熊谷市俵瀬）に名主である父・荻野綾三郎と母・かよの五女、「ぎん」として生まれました。

吟子が生まれた荻野家は、「ながやんち」と呼ばれる長屋門を構える大きな家でした。この長屋門は、現在、群馬県千代田町の光恩寺に移築されています。

父・綾三郎は、藍葉の取引などで大規模な商売を展開していました。また、俵瀬村の名主役だけでなく、周辺の村々を束ねる取りまとめ役も務めた、この地域を代表する人物でした。

吟子の故郷は、埼玉県内の利根川沿いの地域です。深谷の渋沢栄一や羽生の清水卯三郎など、近代日本の成長に貢献した人物を数多く輩出しており、文化的なレベルが高い土地柄でした。



旧荻野家長屋門（群馬県千代田町　光恩寺）

2 最初の結婚と医師への決意

吟子は 15 歳の頃、上川上村（現在の熊谷市上川上）の名家・稲村家の長男・貫一郎と結婚しました。

貫一郎は、 10 代で村の名主役を務めるなど、若くから頭角を現した人物です。明治８年（1875）には埼玉県下初の自由民権運動結社「七名社」の創立メンバーとなり、その後は県会副議長を務めたほか、銀行経営や耕地整理事業など地元の発展に大きく貢献しました。

しかし、21 歳の頃、吟子は婦人病に罹患します。大学東校（現在の東京大学医学部）に２年間近く入院し、一時は命も危ない状態でした。

この入院生活の中で、吟子は男性医師に診察される辛さや、同じ病で苦しむ女性たちの悲痛な声を目の当たりにします。

「自らが医者になり、多くの女性を救いたい」この経験が、医師を志す強い決意となりました。退院後、吟子は夫・稲村貫一郎と協議離婚し、新たな道へと歩み始めます。


稲村　貫一郎
（埼玉県立文書館収蔵
中村（宏）家文書 No.254）

3 文化人・教育者に成長

離婚後、吟子は医師を目指して長い学びの道に入ります。

まず、俵瀬村に近い妻沼村の「両宜塾（りょうぎじゅく）」で漢学者・松本万年に師事します。この塾は地域リーダーを多く輩出しました。のちに女医第２号となる生沢クノ（深谷市生まれ）も松本門下です。


妻沼　両宜塾（現存せず）

23 歳頃には上京し、神道中心の国民教化政策を進める井上頼圀（いのうえよりくに）のもとで国学を学びます。女性指導者を養成する「女教院（じょきょういん）」の教師としても活動しました。


井上 頼圀（『続己亥叢説』）

翌年には、甲府の女性国学者・内藤ます子の熱心な誘いを受け、「甲府女学家塾」で教員として働きます。

ます子の病気を機に甲府を離れると、開校したばかりの日本初の女子教員養成機関、東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）に入学します。ここで約４年間学び、優秀な成績で卒業しました。

吟子は、この頃には、文化人、そして教育者として、立派な成長を遂げていました。

4 医師への遠い道のり

28 歳で東京女子師範学校を卒業した吟子は、「医師になる」という志を公言しました。当時、女性が医師になる道は非常に困難でしたが、吟子は諦めませんでした。

陸軍軍医監・石黒忠悳（いしぐろただのり）の紹介で、私立の医学校「好寿医院」に入学。女性もいましたが、卒業できたのは吟子だけでした。学費や生活費を稼ぐため、横浜の大事業家・高島嘉右衛門家の家庭教師や、農商務省の官僚・前田正名の通信秘書などを務めました。また、友人からは住居を提供されるなど、多くの理解者や支援者を得て、その温かい関係は長く続きました。


石黒 忠悳
（国立国会図書館
「近代日本人の肖像」）

医師免許を得るための「医術開業試験」。吟子は受験を試みますが、女性であることを理由に、２年間にわたって何度も提出した願書は受け取ってもらえませんでした。吟子は、非常に窮地に陥り、海外行きまで覚悟したと語っています。それでも努力を怠らず、群馬県伊勢崎町（現在の伊勢崎市）で医師の助手として働き、実地の経験もしっかりと身につけていきました。


東京女子師範学校第二回卒業生
（お茶の水女子大学蔵）
※向かって一番左奥が吟子

5 日本で最初の公許女性医師の誕生

女性であることを理由に２年間受験を許されなかった吟子は、支援者の石黒忠悳や高島嘉右衛門を頼り、医術開業試験を実施する内務省衛生局長・長与専斎（ながよせんさい）に面会し、受験できるよう訴えました。長与は吟子の実力を認め、意外にも許可します。女性でも実力があれば受験を許可するつもりで、吟子はその基準を満たしていました。



高島 嘉右衛門
（『横浜電気株式会社沿革史』）

33歳のとき、前期の医術開業試験（学科）が実施され、吟子をはじめ５人の女性が受験しましたが、合格したのは吟子だけでした。34歳のときには、後期の医術開業試験（実地）も行われ、吟子は合格します。



荻野 かよ
（久保田家蔵）

こうして、明治18年（1885）、日本で初めて国家試験に合格して医師となった女性第１号が誕生しました。この試験は受験者128人中合格者わずか２７人という狭き門でした。

合格のおよそ１か月後、親族で唯一医者になることを応援してくれた母・かよが亡くなりました。吟子は帰郷しましたが、母の最期には間に合いませんでした。

6 医師としての活躍とその先見性

母が亡くなった翌月、吟子は東京・本郷湯島三組町（現在の文京区）に「荻野医院」を開業しました。吟子の評判は高く、すぐに手狭となったため、下谷西黒門町（現在の台東区）へと医院を移転しています。

開業から２年後には、新聞で吟子の活躍が報じられるほどでした。特に子宮病の治療においては最も優れた医者であると高く評価されています。



医師になった頃の吟子
（『日本女医史』）

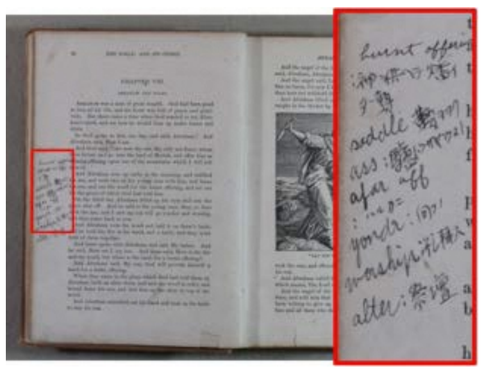
当時、社会では「女性医師は必要なのか、不必要なのか」という議論が活発に行われていました。吟子は自らの論文で、医療分野によっては女性医師の方が適しているものがあるとし、女性医師を育てるための女子大学の設置などを訴えました。この論文の中では、性犯罪被害者の診察には女性医師が必要であると説いており、現代にも通じる課題を約１５０年も前に指摘していたその先見性には驚かされます。



現在の湯島三組町付近
※この付近に荻野医院があったと推定される。

7 女性や弱者のために ー社会活動家として

３６歳でキリスト教の洗礼を受けた吟子は、生涯にわたり熱心な信者でした。その信仰心は、女性の地位向上や社会の不正を正すための活動へと彼女を向かわせます。



吟子所持の聖書
（せたな町生涯学習センター蔵）
※ 吟子の書き込みがある。

当時、女性の社会運動の中心であった東京婦人矯風会では、副会頭や風俗部長を務めました。特に、国が認めた売春を廃止する「廃娼（はいしょう）運動」に力を入れ、７００名もの聴衆を集める大演説会を開催するなど、積極的に活動しました。

また、明治２３年（1890）、衆議院が女性の傍聴を禁止した際には、各界の女性代表21名の一人として撤回を求める陳情を行います。この働きかけにより、同年中に女性の傍聴が認められました。



濃尾大地震による震災の様子
（愛知県津島市立図書館蔵）

さらに、明治２４年（1891）の濃尾地震で孤児になった少女たちが売買されるという悲惨な状況を受け、救済活動に尽力。自身の「荻野医院」を孤児たちの収容場所として提供し、自ら世話をしました。

8 華やかな生活を捨て北海道に

医師として、また社会活動家として東京で活躍していた吟子。華やかな日々を送る彼女の運命は、一人の青年との出会いによって変わります。



志方 之善
（せたな町生涯学習センター蔵）

キリスト教の布教に情熱を燃やす13歳年下の青年・志方之善（しかたゆきよし）が荻野医院に宿泊した際、二人は意気投合します。周囲の反対を押し切り、吟子３９歳、之善２６歳で結婚しました。

之善には、キリスト教徒だけによる理想郷を創るという大きな目標がありました。犬養毅（いぬかいつよし）から利別原野（としべつげんや、北海道今金町）の土地借用を取り付けます。その土地を「インマヌエル」と名付け、明治２４年(1891)に理想郷実現のため、北海道へと旅立ちました。

吟子は東京で準備を整え、明治２７年（1894）に夫のもとへ向かい、インマヌエルに入植します。しかし、キリスト教徒以外の入植が始まると、之善は理想郷の維持を断念し、インマヌエルから撤退します。その後、新たな事業としてマンガン鉱山の採掘を試みるため国縫（くんぬい、北海道長万部町）へ向かいますが、これも失敗に終わります。吟子も夫に同行しています。



現在のインマヌエル
（今金町神丘）

9 北海道での奮闘

明治３０年（1897)、４６歳になった吟子は、北海道のニシン漁で栄えていた瀬棚（現在のせたな町）へと渡り、医院を開業します。

当時の医師は往診が多く、馬に乗って往診に出かける吟子を、夫の之善が馬のくつわ（手綱）を取って支えていた、という夫婦のエピソードも残されています。吟子は瀬棚でも社会活動に積極的で、自身の医院で子どもたちのための日曜学校を開いたり、地元の有力者の妻たちを集めて「瀬棚淑徳婦人会」を結成したりし、地域活動を推進しました。



吟子と瀬棚淑徳婦人会幹部
（真ん中奥が吟子、せたな町生涯学習センター蔵）



荻野吟子開業の跡
（せたな町）

５０歳頃には、一時的に札幌の薄野（すすきの）付近で開業していた時期もあり、婦人病の患者を診ていたと考えられます。しかし、自身が体調を崩してしまい、姉友子がいる熊谷で療養生活を送ります。体調が回復して瀬棚に戻った後、今度は夫の之善が体調を崩し明治３８年（1905)、４０歳の若さで亡くなりました。吟子は、夫の墓を「インマヌエルの丘」に建立しました。

10 東京への帰還、そして晩年



晩年の吟子
（国立国会図書館「近代日本人の肖像」）

明治４１年（1908)、吟子は再び東京へと戻り、翌年には新小梅町（現在の墨田区）で医院を開業しました。５７歳になっていました。姉の友子と、養子にした夫・之善の姪（トミ）とともに暮らし始めます。

医師としてはあまり繁盛しなかったようですが、東京には経済的に成功した親戚が多く、吟子を大切に扱いました。友人や親戚たちに囲まれ、比較的穏やかな晩年を過ごしていた様子がうかがえます。

この頃、女性医師の数は増え、ついには「日本女医会」が結成されます。会の機関誌『日本女医会雑誌』の創刊にあたり、吟子のインタビュー記事が創刊号に掲載されることになりました。

大正２年（1913)、吟子は脳卒中で倒れ、6月２３日に親戚たちに見守られながら６２歳で亡くなりました。葬儀には多くの友人や後進の女性医師たちが集まり、その霊前には完成したばかりの『日本女医会雑誌』が捧げられました。

吟子の墓は雑司ヶ谷霊園（東京都豊島区）にあります。



荻野家墓地
（東京都豊島区雑司ヶ谷霊園）

荻野吟子年表

嘉永４年（1851）	３月３日、武蔵国幡羅郡俵瀬村（現熊谷市俵瀬）に生まれる。
慶応２年（1866）	このころ上川上村の名主・稲村貫一郎と結婚。（１５歳）
明治５年頃（1872）	病気療養のため大学東校に入院。医師になる決意をする。（２１歳頃）
明治７年 頃（1874）	国学者・井上頼圀の元で学び始める。（２３歳）
明治８年（1875）	内藤ます子の甲府女学家塾に赴任。東京女子師範学校に入学２４ 歳）（明治１２年7月同校を卒業）
明治１２年（1879）	私立医学校の好寿医院に入学。（８ 歳）（明治１５年卒業）
明治１５～１６年（1882）	東京府、埼玉県等に数度医術開業試験の願書を提出したが却下される。群馬伊勢崎町で医師の助手を勤める。
このころ	内務省に赴き医術開業試験受験について訴える。、
明治１７年（1884）～ 明治１８年（1885）	医術開業試験の願書が受理され、明治１７年９月前期試験に合格。 明治１８年３月後期試験にも合格し、女性医師第１号となる。 ５月本郷湯島三組町（現文京区）に医院開業する。（３４歳）
明治２０年（1887）	本郷教会にて洗礼を受け、東京婦人矯風会に入会する。大日本婦人衛生会幹事となる。（３６歳）
明治２１年（1888）	東京婦人矯風会副会頭となる。（３７歳）
明治２３年（1890）	東京婦人矯風会風俗部長に就任する。志方之善と結婚する。（３９歳）
明治２４年（1891）	夫・志方之善、入植予定地（現今金町）に入る。 吉岡弥生らの求めに応じ、女医学生懇談会の顧問として活躍する。（４０歳）
明治２５年（1892）	荻野医院を、濃尾地震の震災孤児受入れのため、孤女学院の仮校舎として提供。 明治女学校舎監となる。（４１歳） ※その他女子教育や、社会活動に奔走する
明治２７年（1894）	北海道インマヌエル（今金町神丘）に入植。（４３歳）
明治３０年（1897）	瀬棚に移り、医院を開業する。淑徳婦人会を結成し、会長となる。姪、トミを養女とする。（４６歳）
明治３８年（1905）	夫、志方之善亡くなる。（５４歳）
明治４１年（1908）	北海道から転居し、東京の向島新小梅町（現墨田区）に医院を開業する。（５７歳） ※日本女医会の活動に参画する。
大正２年（1913）	６月２３日永眠。（満６２歳）。東京の雑司ヶ谷霊園に埋葬される 。

吟子ゆかりの場所 1

埼玉県熊谷市

生誕の地は「史跡公園」、「熊谷市立荻野吟子記念館」として整備されている







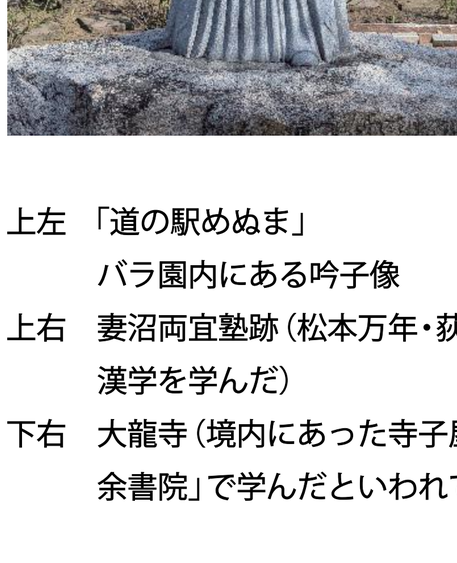




上　　荻野吟子記念館
左下　荻野吟子女史像
下右　明治当時の周辺地図



上左　「道の駅めぬま」
　　バラ園内にある吟子像
上右　妻沼両宜塾跡（松本万年・荻江から漢学を学んだ）
下右　大龍寺（境内にあった寺子屋「行余書院」で学んだといわれている）





北海道久遠郡せたな町

診療にとどまらず、婦人会活動、日曜学校創設に尽力した







上左　荻野吟子開業の跡
上右　荻野吟子公園
　　「荻野吟子女史像」（生誕150周年を記念し、旧妻沼町が建立）



下左　荻野吟子公園
　　「荻野吟子女史顕彰碑」
下右　せたな町のシンボル
　　「三本杉岩」

北海道瀬棚郡今金町

夫、志方之善に伴い、インマヌエルの開拓に従事した







上左　インマヌエル発祥の碑
下左　志方之善墓（神丘墓地）



上右　今金インマヌエル教会
下右　旧国鉄今金駅跡地に建つ
　　「デ・モーレン」（風車）

吟子ゆかりの場所 2

群馬県邑楽郡千代田町

生家にあった長屋門が光恩寺に移設されている







左上　荻野家長屋門（現在は「合格の門」として多くの受験生が訪れる）

右上　吟子像

左下　赤岩渡船（動力船で利根川の対岸同士、千代田町と熊谷市をつないでいる）

埼玉県深谷市

女性医師第２号「生沢クノ」生誕地





左　生沢クノ（吟子に次いで２番目の公許女性医師となった。吟子の師である松本万年からも学んだ）

右　正覚寺　生沢家墓（墓碑にクノの名が刻まれている）

東京都文京区

開業免許を得て、この地から女性医師として出発した





左　開業地（湯島三丁目地内）

右　本郷教会（キリスト教の洗礼を受け、葬儀も行われた
※1927 年に現在の場所に移る）

東京都墨田区

北海道から帰京し、亡くなるまでを過ごした



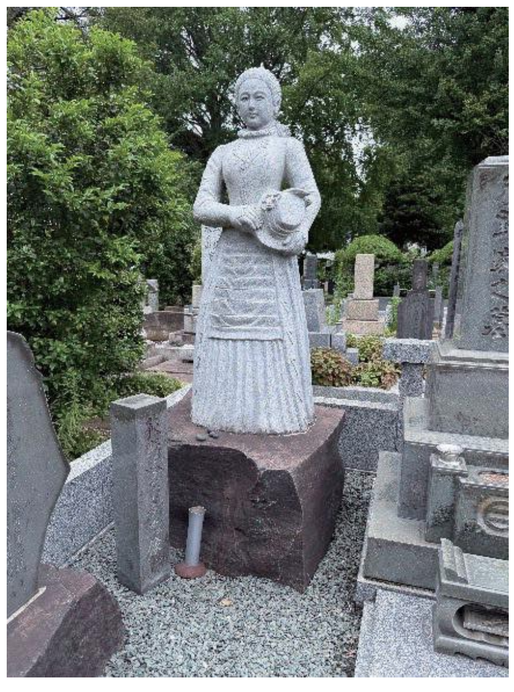


開業地跡（向島地内、スカイツリーの見える源森橋近く）

東京都豊島区

荻野吟子墓所（雑司ヶ谷霊園）





荻野吟子墓所（雑司ヶ谷霊園）

国立科学博物館地球館

科学技術の偉人としてレリーフ展示されている





科学技術の偉人としてレリーフ展示されている